

Title	経済政策の極致 (アダム・スミスとオッペンハイマーに於ける自由主義研究の一節)
Sub Title	
Author	向井, 鹿松
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.7 (1924. 7) ,p.929(19)- 958(48)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240701-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

互つて、監督を加へる一事であつて、獨逸としては斯る監督の爲めに、殆ど財政上の自主獨立を喪失した嫌なきを得ない。償金問題解決の爲めに、暫く此屈辱を蒙るの已むを得ざるに至つたものとして、果して永く之に堪へるであらうかどうか。將來に物議の種子を蒔いたものとしなければならぬ。

要するに獨逸の外債發行はダウズ委員會の報告が關係諸國の政府に依つて承認された曉に、第一に行はる可き所であつて、此計畫の下に與へられる保證に對して、公衆の置く信用の程度の厚薄は自ら其成否を決定する要素と爲るのである。然しながら既に短期の性質であるが、倫敦并に紐育の銀行業者は獨逸に於ける金割引銀行の設立に關して、信用を與へて居る事實がある以上は、此點に於て強ち望なしとす可きではなからうと思はれる。

經濟政策の極致

(アダム・スミスとオツペンハイマーに於ける

自由主義研究の一節)

向井 鹿松

Franz Oppenheimer は近代獨逸經濟學界に於ける一偉才である。彼の論文を読む者は、其潑刺たる才氣の紙上に溢るるを認むるであらう。假令異論はあるとしても、彼が其畢生の力を振つて打ち建てんとする所謂 Das ökonomische System des Liberalen Sozialismus の試みは、彼の深き學識と明晰なる頭腦及び其才氣を以てして、初めて企て得可き事業と云はなければならぬ。所謂自由社會主義 (Der Liberale Sozialismus) とは、一つの經濟秩序に對する信仰及び努力であつて、此の秩序の下に於ては經濟的利己心の支配の下に完全なる自由競争が行はれ、而も所得としては只勞働所得の

みが存在して現代の資本利潤及び地代は何等の弊を生せざる程度に消滅して只其片鱗を残さずのみとなり、従つて又資本主義的經濟に於ける經濟的社會的階級關係の消滅してしまふものを云ふのである。けれども所謂此の自由社會主義は Oppenheimer に始まるものではない。其端は既に古く Adam Smith の經濟學に發する。Adam Smith の富國論の中には似而非自由的、資本主義的階級的理論と眞正自由社會的、人類理論が共に相交はりて包括せられてゐるのである。前者からは所謂 Bourgeoisökonomik が生まれ、これが人口の法則を探り入れて其頂上に達したものが Ricardo の經濟學である。これから更に二つに分かれて一つは普通の經濟學となり、他の一つはマルクス式集産主義の經濟學説となつた。後者は人口の法則を排斥したために前者に反して自から樂觀的となつた。此の派の先驅者は Jones であるが、其最初の主たる代表者は Carey であつた。けれども彼は尙社會自由的 (Sozialliberal) であつた。此の考を發展さして自由社會主義たらしめたのは Dühring である。此の Dühring の自由社會主義に對して其の多くの困難なる部分に於て極めて重要なる修正を加へたのは Theodor Herzka である。けれども此の Herzka の自由社

會主義はマルクスの所謂科學的社會主義の要求を充たさなかつたからして、此の點に於て Dühring に劣るものであつた。然るに Oppenheimer は自由社會主義を彼れ自から凡ての科學的社會主義の試金石たることを無條件に承認するマルクスの要求に適合せしめんことに特に努めてゐる。則ち彼は其の學説が頭腦の發明に非ずして、問もなく資本主義經濟其物の内部の發展からして生れ出つることを主張してゐるのである。此の意味に於て彼の自由社會主義はマルクスの意味に於ける科學的社會主義である。けれどもマルクスの社會主義とは全然異なるものである。蓋しマルクスは只大資本家的の似而非自由主義のみを眼中に置いたからして、單純なる自由主義と社會主義は永久に相反するものとして見たのである。然るに Oppenheimer は階級の爲めに非ず、眞に人類の爲めの眞の自由主義は社會主義と同一であると考へてゐる。換言すれば自由主義の方法によつて社會主義に到達せんとするものである。かかる社會が現在の經濟社會と異なる所は、何人も自から耕やす以上の土地を所有することを許されない一事に過ぎないのであつて、かかる社會の市場關係は經濟的競争及び經濟的利己心の完全なる自由によつて

支配せられてゐるもので、而も凡ての經濟的利害は完全に一致調和 (Volle Harmonie aller wirtschaftlichen Interessen) の存在するものであると云ふのである。

Oppenheimer が所謂自由社會主義の學說を説くや、彼が其思想を全然 Adam Smith から直接採つて來てゐることは彼れ自からの明言する所である。彼の著たる Theorie der reinen und politischen Ökonomie の中には Adam Smith を Altmeister 又は Meister für allen Meister と呼びて、到る處に其所説を引用してゐるのである。只彼と Smith の間に明かなる相違が存在するならば、それは次の點である。則ち Adam Smith は其所謂 the appropriation of land and the accumulation of stock は其所謂 The original state of things が經濟的原因に基き自然的に發達して來たもので、從つて利潤も地代も正當なるものと認めんとするのであるが、此點に於て Oppenheimer は Karl Rodbertus, Carey, Dühring, Marx 等と共に之を以て非經濟的權力の結果であるとするのである。土地の私用、資本の蓄積を經濟的原因から自然的に發達した結果と観る者は經濟的及び社會的階級の相違を自然にして正當なるものとし、之を暴力の結果として見るものは不自然なるものとして批難せんとするのである。Oppenheimer によればか

かる權力關係に基く獨占的地位を除くことはやがて完全なる自由主義の下に凡ての人々の利害の調和する社會を出現すると云ふのである。

二

Oppenheimer の Theorie der reinen und politischen Ökonomie は則ち此の自由社會主義學說の建設のためにかかれたものに外ならない。けれども其材料の取扱ひ方には富國論と Oppenheimer の此の書との間には重大なる相違の存在するを認めなければならぬ。Adam Smith が富國論を編むに際して事物の本質を認識せんとする純理論的見地と、目的を以てする實際政策的見地の二つに左右せられてゐるところは學說の一致してゐる所である。彼の自然法に關する講義を聞くものは直ちに、實際上の法規を作るに際し直ちに實際に應用し得る法律の本質及び職分の認識に達せんとする試みは一つの理論であると云ふ彼の意見を知ることが出来る。此と同一の考は彼が國富論を編むに際して又確かに採つた見解でなければならぬ。(Schumpeter, Epochen der Dogmen und Methodengeschichte S. 52) 然らば此の理論的方面と政策的方面は實際に於て何れが多く彼を支配したか、此の點に於て學者は後

者の見地が寧ろ實際に於て富國論全般の地位を左右してゐるものと見てゐる。則ち富國論の中には此の書が自由貿易、産業主義の主張、辯護として書かれることが暗示せられてゐると云ふのである。Ristはアダム・スミスが經濟現象を取扱つたのは之を科學的考察の對象としてばかりでなく、尙又之が一般の幸福のための手段たる點に於て興味を有してゐたので、而も彼の興味の主たる中心は此の後者の中に集中せられてゐたと云つてゐる。(Gide and Rist, *Geschichte der Volkswirtschaftlichen Lehmeinungen; deutsche Uebers.* S. 97) 又實にアダム・スミスは其第四編の緒論に於て左の如く説いてゐる。曰く政治家又は立法者の學の一分科として考へられる經濟學は二つの異なる目的を有す。第一人民に對し豊富なる收入又は生活資料を給與すること、之を一層適切に云へば人民をして自からかかる收入又は生活資料を得せしむること、第二國家をして其公務を行ふ爲めに充分なる收入を得せしむること、其であると。(Wealth of Nations, Cannan's Edition, Vol. I. p. 395) 更に又彼は他の場所に於て「各國の Political economy の大目的は其國の富と力(The riches and power)を増加せしむるに在り」(Ibid, p. 35)と云つてゐる。又實際に於て當時の學者の主

として興味を感じた所は政策論であつたからして國富論第一第二の兩編に説かれる、經濟理論も畢竟一面には自由主義經濟政策主張の爲めの基礎準備として發達したものと見られるのである。(小泉教授論文三田學會雜誌アダム・スミス紀念號一〇二—一一三)

此の點に於て Oppenheimer の Theorie der reinen und politischen ökonomie は純學術的のものであつて、彼は此著に於て所謂自由社會主義の學説を建設せんと試みたものであるが (Theorie, Vorwort, S. 80, 588) 而も彼は之を目的のために、又喧傳の爲めに書いたものではない。彼自からも其序文に於て云るが如く、彼の學説は二つの前提の下に立つものである。則ち(一)土地の私用 (Appropriation of Land) 資本の蓄積 (Accumulation of Capital) が經濟原因から自然的に發達して來たと云ふ此の説が從來の資本主義經濟學の基礎をなしてゐること、(二)而して此の説は眞實でないこと云ふことである。(註二) 此の二つの前提からして自由社會主義の學説を建てんとしたのである。則ち彼は現代資本主義社會の弊害は非經濟的原因から生じた土地の私有及び次いで來れる諸種の獨占的權力關係の結果であつて、決して自由競争の

結果ではない。否自由競争の存在の結果として價值が形成せられ生産及び分配の標準となつて一つの經濟社會が構成せらるゝものである。而してかかる價值は自由競争の結果としてのみ成立するものであるからして、かの Kautsky が Die Soziale Revolution, 1907 に於て其頭の中に作り上げたやうな市場なき經濟社會は成功し得るものではない。(註二)かの自由競争を惡魔となす集産主義者の説は誤まつてゐる。(A. a. O. S. 308)否完全なる自由競争あるが爲めに凡ての人は自己の勞働に相當する公正なる所得を得るもので、又これあるか爲めに凡ての利害は調和はするものである。而して完全なる自由競争の下に凡ての利害の一致調和する新らしき社會の實現は既に現代資本主義社會の殻の中に構成せられつゝあるからして何等の産婆の助けを俟たずとも生れ出るであらうと云ふのである。彼の議論は前述の二つの前提の下に於て純粹の科學的推理の上に打ち立てられてゐるのである。此の純理論的方面に於ける Oppenheimer の意見は彼の所謂 Altmeyer Adam Smith の考と全く同一である。則ち自由競争の結果として凡ての人の利害の一致調和を説く所、又獨占を以て自由競争を抑制する惡制として之を批難する如き皆同一の思想に基くものである。

是を以て見れば Adam Smith の思想の根柢をなす自由主義を Oppenheimer は無條件に之を取り入れたのである。而して此自由主義の思想を一般經濟政策の基礎となす時に茲に Adam Smith の自由貿易説、産業主義、從つて又彼の富國論となるものである。自由主義を一般社會組織及び制度の純理論的基礎となす時に茲に Oppenheimer の自由社會主義從つて又彼の Theorie der reinen und politischen Ökonomie なるものである。けれども余が本論に於て説かんとする所は完全なる自由競争の實現はかかる理想社會を生むと云ふこの Oppenheimer の重きををいた純理論的方面ではない。此の點の闡明はこれを他日の發表に譲づ、茲には Adam Smith の富國論に於て重を置いてゐる經濟政策の方面に於ける自由主義の意義の研究丈に止めんとするものである。此の點は Oppenheimer の學說に於ては其主要部を占むるものではなく、只其經濟社會の發展に關するかれの社會學的考察の上に表はれてゐるものであるが、其説く所は Adam Smith の説をかれ Oppenheimer の明晰なる頭腦の下に最も明かに近代式裝の下に表はれてゐるからして、左に凡ての經濟政策

の極致とも云ふ可き部分に關する兩學者の意見の概要を説明する。而して茲に所謂經濟政策の極致はやがて又商業の社會的意義となるのである。

(註一) クラシカル、スクールの自然法的世界觀の下では財産(土地を含む)を以て自己の努力、蓄積の結果自然的に發達したもので、所有者は之に對し當然の權利を有する。云ふ考を懐いてみた。此の考はMarxの所謂Kinderfibelと名づくる所のものであるがSchumpeterは此の社會主義者の批難はスキュスの土地の場合には常らなると云つてゐる。蓋しスキュスの用ゐてゐる土地のappropriationと云ふ言葉はOkkupationと云ふ語に當てて差し支へないもので、此の點に於て歴史上必ずしも誤まりたる觀念を示すものでないとして辯護してゐる。(a. a. O., S. 72)

(註二) 市場に於ける交換價值は經濟を行ふ標準となるもので、かゝる價值なき經濟組織の永續す可からざることは最近のNisesのDie Gemeinschaft 1922の中にも述べてある。

三

Adam-Smithの富國論が經濟政策の目的を達する手段として書かれたことは前述した所である。而して彼は經濟政策の目的が其國の富及び力の増進にあると斷言せしこと亦前述した所である。然かり既に其目的が國富の増進にありとせば其手段も亦國富の性質及び原因を探究して後初めて知ることが出来るのである。

則ち彼が其大著にAn inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nationsと云ふ名稱の附せられし所以も之を窺ふことが出来るのである。茲に於てか國富の増進は生産力の増加の問題に歸着せざるを得ないのである。則ち經濟政策の極致は生産力の増加に外ならないのである。然らばアダム・スキュスは此の國富増進の手段たる生産力の増加を如何に解釋し、如何なる方法によつて増加し得可きやと考へたかと云ふと、此の問題は余は本誌の昨年のアダム・スキュス紀念號に於て詳細之を論じたからして更に之を繰り返へす必要はないやうである。けれども茲に注意を要するのはそれは主として資本の立場を論じたのであつた。則ちアダム・スキュスによれば一國の富を増加する方法は(一)生産的勞働者の數を増加するか、(二)又は生産的勞働者の生産能力を増加するか何れかである。第一は數量の問題で、第二は品質の問題である。而して第一の問題を解決するには貸銀の増加に當る可き資本の増加を必要とし、第二の問題を解決するには分業を行ふことを必要とするとなつてゐる。(アダム・スキュス紀念號拙稿二三一—二三二參照)其際余が主

として論じたのは第一の資本に關する問題であつた。而して本論に於て論せんとするは第二の分業による生産力の増加し従つて又國富の増加に關するものである。

Rist は分業の其富國論に於ける地位を論じて、分業は他の何れよりも國民の富の増進に貢献すること大であると云つてゐる。(A. a. O. S. 77) 而して此の事實はスミスが其分業論を富國論の卷頭に置き、而して此の分業の根本的考を富國論全體の基礎としたる事實に之を見ることが出来るのである。(Rist, a. a. O., S. 64)

スミスは自然法的考を有した結果として、分業發生の原因を以て、人の心性に宿る交換の性情に因るものであるとした。而して彼は此の國富の増加の原因たる分業の社會に行はるゝ程度は市場の廣狹の範圍によるものであるとした。此の内第一の人は生れながらにして交換の性を有す、分業は此の交換の必然的結果(The necessary consequence)なりとした點は後世學者の批難を招いた點であるけれども(Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft S. 315 ff) 第二の分業の行はる程度は其社會の有する市場の大小によつて決せられる、従つて市場大なれば分業充分に行はれ、其

結果國富は迅速に増進すると云ふ説は一定の意味に於て千古の眞理と目して差し支へないものである。則ち Oppenheimer の經濟社會發展に關する叙述は此のスミスの分業と交易經濟社會との關係其生産力増進に關する説を系統的に、而も明晰にしたるものに外ならないのである。

四

アダム・スミスが勞働を以て國富の源泉であるとしたやうに Oppenheimer も亦勞働を以て唯一の生産力、彼の用語によれば獲得力(Beschaffende Kraft)であり、凡ての財寶の源泉であるとした。(A. a. O., S. 138) 而して此の富の源泉たる勞働は其組織によつて、換言すれば分業によつて著るしく其生産力を増加するものである。其例として Adam Smith がビン製造業に於ける技術的分業の例を挙げ、之によつて勞働の生産力が四千八百倍する可能性を説くに對して(Ibid pp. 67) 彼れ Oppenheimer は分業は勞働の生産力を數百萬倍(vermillionfachen)することを説き、土地の人口收容力は過去に於て二萬倍したことを説いてゐる。(A. a. O., S. 139, und auch S. 101)

然らば斯の如き偉大なる生産力の増加を生ずる分業及び結力(Arbeitsleistung und

Arbeitsvereinigung)は如何にして發生したか、其原因如何。Adam Smithは此問題に答へて曰く、それは人が最初から分業が富を増進するの手段であることを識つて之を行ふた結果ではなく、全くそれとは関係のない事情則ち人は生れながらにして有する交換の性向の結果であると云つてゐる。(Ibid. p. 15)而して此の交易は人間の天性であると云ふこと、並びに分業は交易經濟社會にのみ存在し得ると云ふ考は經濟史家の研究によつて打破せられてゐること前述の通りである。則ち Bücherに云はしむれば人は寧ろ交換を嫌惡する性ありと云つてゐる。(P. P. O., S. 92)又太古の封鎖的家内經濟には交換はないけれども分業の行はれたこと又普く世人の知る處である。此のアダム・スミスに對する批難の第一の點は異論はないとしても、第二の批難は聊か研究するを要するのである。則ち太古所謂遊牧民中狩獵民の間に行はれた分業は性別によるものである。従つて凡ての男子のなす所、凡ての女子のなす所は皆同一であつて、男子相互間、女子相互間の勞働には何等の相違の存在しないものである。故に經濟的分化従つて又社會的分化(Differenzierung)は生じないのである。而して此種に分業は人間の性別の結果自然の必要に強要

せられて發生したもので(Oppenheimer, a. a. O., S. 95)經濟上の原因から發生したものではない。又既に凡ての男子のなす所及び女子のなす所皆同一の仕事であつて、男子相互間、女子相互間に何等仕事の差別のない以上はかかる分業が生産力を増加する限度も始めより限られてゐて、此の方法を以て特別に生産力を増加するの手段となすことは出來ないのである。此故に生産力増加の手段として分業を考察する時には、分業は必ずや經濟的、社會的分化を生ずる分業でなければならぬ。而してかかる分業は、自己の生産物は之を他人の用に供し、自己は他人の生産物の分配に與かると云ふ豫見的考慮なくしては行はれないものである。而して此の相互補充は普通市場に於ける交易によつて行はれるものであるからして、生産力増加の手段としての分業は交換を待つて始めて行はれるものとなす時は之を必ずしも誤まりと云ふことは出來ないのである。

此故に社會的分化を生ずる分業は相互の協力(Co-operation)である。則ち分業による現代の社會は協力による社會である。協力は分業の反面をなす現象である。故に分業を以て生産力増加の爲めの一つの勞働組織として之を見る時は分業又

は結力の名で呼ぶけれども、之を社會の見地から見れば協力に外ならないのである。而して此の分業を示す語として此協力 (Co-operation) と云ふ字は Smith の亦用ふる所であつて (Vol. I. S. 14) Bûcher も既に指摘してゐるやうに、Smith は單に個別觀の下に分業を見たものではない。分業の反面は多くの人の勞働の協力作用たることは彼の亦看過しなかつた所である。(Bûcher a. a. O., S. 265) 否彼は社會を以てかかる協力よりなる共同體と見たものである。彼が分業論を富國論の初めに置いたことは生産力の増加と云ふ技術的問題以外にかれの議論がかかる協力團體たる社會の富を研究するものであることを示す上に於て又重大なる意義を有するものである。而して又分業の技術的利益よりも寧ろ Oppenheimer は社會を以て分業に分たれ人々の綜括せられる點に重きを置いて説きてゐるのである。

五

斯の如くアダム・スミスが交換を以て分業成立の原因としたことは世人の批難を受けた所であるが、彼が分業は市場の廣狹によつて制限せられるとした點は Oppenheimer が眞理として直ちに承け容れた所である。則ち彼は分業の成立の條

件として吾人はスミスの用ひた市場と意味を同じくして而も富國論に於て見ることの出来ない用語を以て來た。則ち集合需要 (Der Kollektivbedarf) と云ふ言葉之である。茲に所謂集合需要とは其社會の土地の人口收容力を以て養ひ得る人々の個々の需要の總計を云ふのである。則ち Oppenheimer の説によれば社會的分化は集合需要の増加と、此の集合需要充足の可能性によるものである。(a. a. O., S. 26) 而して彼は此の經濟的社會的分化と集合需要との關係を特に力説した。則ち彼の説によれば技術の發明が分業や結力を生じ社會的分化を生ずるのでなくして、先づ其社會に於ける集合需要が増加し、其増加の高が一定の度に達し、以て一定の發明又は技術を經濟的に利用し得るに及んで茲に初めてかかる發明や機械は利用せられ、分業は生じ、社會的分化は生ずるものである。例之田舎に於て人口の尙稀少なる時には一人の鍛冶屋で、農具、刀、鋌、前其他苟くも金屬加工に關する凡ての勞働に従事して、敢て専門的分業による鍛冶職の別が生じない。而して其理由は一村に於ける集合需要の高の小なる爲にそれその分業による専門的鍛冶職を維持することが出来ないからである。如何に立派なる機械が出來ても、又交通

機關の發明があつても、之を利用せんとする集合需要の高が一定の高に達しなれば、結局之を利用するの費用比較的大となるために經濟上の理由からして之を實際に使用することが出来ないものである。従つて社會的分化は生じないものである。ワット以前既に百年の昔から英國の鑛山には既に蒸汽器械が用ゐられてゐた。而も現代文化の創造者と號する此強大なる力が當時一般に利用せられなかつたのは、時代が尙熟せず集合需要の尙過少なりし結果に外ならないのである。之を以て見れば分業及結力従つて又社會的分化は集合需要の増加を俟つて初めて可能となるものである。而して集合需要の増加大なれば益々社會的分化は盛んに行はれるものである。國の生産力は増加するものである。(A. a. O. S. 96H)

六

然らば集合需要増大せば無制限に社會的分化が行はれるかと云ふと之れには又一定の限度が存在する。換言すれば集合需要の増大は其社會の土地の物資産出力によつて制限を受くるものである。(A. a. O. S. 100f)尤も土地の此の人口収容力(Kapazität des Landes und Dichtigkeit der Bevölkerung)は分業及び結力によつて甚だし

く増進するものである。例へば太古の狩獵によつて生活する狩獵民は一人に付き一平方哩以上の土地を要した。換言すれば一平方哩の土地は漸やく一人を收容し得るに過ぎなかつたが、今日の商工業の發達した歐洲では一平方哩に一萬五千人を收容し之を養ふことが出来るのである。けれども分業及び結力による此の土地の收容力の増大にも亦一定の制限の存するものである。則ち土地收穫遞減の法則之である。此法則の存するが爲めに人口一人に對する農業上に於ける食料品の生産高は漸次遞減せんとする傾向を有するものである。茲に於てか社會的分化の條件たる集合需要の増加は其效果に於て互に相矛盾する二つの勢力下に立つてゐるものである。則ち一方には智識器械の發明によつて土地の人口收容力を大ならしむる分業及び結力の勢力あると共に、他方には土地の人口收容力を限定せんとする土地收穫遞減の法則が存在作用するのである。而して第一の勢力は或る一定の限度迄は常に第二の勢力に打ち勝ち、かくて其國の文化は増進するものであるけれども、而も土地の人口收容力に最高限度の存在することは疑の餘地の存しない所である。事茲に至ればかゝる社會は經濟發達の極度に達

したるものにて何等かの活路を見出すに非ざれば其の進歩は停滯するのみならず、社會的困窮を惹起するに至るものである。茲に於てかかゝる社會は分裂して其の一部は他地方に移動し、或は人爲的制限によりてこの窮境を脱せんとするに至る。これ即ち自然民の間に一般に行はれる老弱者の人爲的隠退又は幼者の殺戮と云ふ現象となつて表はれる所以である。(A. & O. S. 98-104)

七

かゝる方法による時は人口の稠密の度は減ずるものである。けれども之と同時に従つて又集合需要が減ずる時は生産力發達の根元たる社會的協同の發達も見ることが出来ないのである。人口收容力の極度に達したる一社會を救済するの道はかゝる消極的方法ではなくして、尙積極的方法が存在するのである。則ち此の方法は殆んど集合需要の極度に達したる多數の經濟社會が合同統一して新らたなる一つのより大なる經濟社會を組織することである。經濟社會の集化 (Integrierung) 是である。經濟社會の集化は二つの方法に於て行はれる。一は武力による政治的集化で、二は經濟的手段による平和的集化である。何れの手段に

よつて集化が實現せられるとししも其結果は常に集合需要の増加となつて分業及び結力を生じ、以て其國の生産力を増大するものであるが、本論に於て問題となるのは後者の平和的手段による經濟社會の集化である。而して此の集化を生ずる平和的手段は則ち交換又は商業に外ならないのである。此の方法によつて一つの經濟社會は他の經濟社會と合して一つの大きな且つ高度の經濟社會、Oppenheimer の所謂市場社會 (Marktgemeinschaft) を構成するに至るものである。而して此の商業は普通文化の發展したる社會が、文化の程度尙幼稚なる社會に向つて仕向けられ、茲に双方に於ける餘剰品の交換を以て始まるのが常である。かくの如く商業によつて經濟社會が擴大すると茲に集合需要は増大し、其結果として協力が發達するに至るものである。則ち到る處に輸出工業が發達し、工業は益々分化し、商業は益々活潑に行はれ、凡て運搬に必要な諸工業の發生分化を生ずるものである。

かくの如き市場經濟は國家の成立を以て初めて其頂上に達するものである。蓋し國家は内外に於て平和治安を維持するの必要に迫らるゝものであつて、而し

てこの平和こそ商業發達のために最も重要な爲であるからである。更に又自然的の道路水路なき所にては國家は自から既に國防及び治安維持の必要から交通の便を計る必要があるのである。而してこの道路は商業發達の爲めに第二の重要な條件をなすものである。(A. a. O., S. 107-9)

けれどもかかる經濟社會の集化にも亦限界の存在するものである。則ち商業の行はれる範圍は運輸に對する障害如何によるものである。而して此の運輸の障害は勞働の協力に對する第二の根本法則をなすものである。然かり而して此の運輸障害の度は運輸の費用の大小を制約し、此の費用の大小は商品が商業の目的物となり得る可能性の大小を制約するものである。而して此の運輸の障害は其原因が財貨の性質及び運搬用具に存在する絶對的障害、財貨の價值に存在する比較的障害、並に政治的障害の三種に分つことが出来る。之を要するに社會に於ける凡ての發展は此の分化と集化の結合の結果であつて、分化の極は集化を生じ、集化の發達は分化の進化を惹起しかく、經濟社會を進展せしむること、尙機械の兩齒車が互に他方を進轉せしむると同じ關係を有するものである(A. a. O., S. 12)

かくの如くして一つの經濟社會に於いて集合需要増加の結果として分業が發達増進する場合にはかゝる社會は自然的又は政治的運輸の障害を除去するの力を有するに至り、而して之によりて他の經濟社會との新らたなる集化を實現し得る力を有するに至るものである。而してこれによりて再び集合需要と之に伴ふ分化は増加し土地の人口收容力は増加し人口は稠密となり、土地收穫遞減の法則が其の極度に達せざる以前に更らに再び新らたなる運輸の障害を除去して更らに新らしき集化を生じ得るに至るものである。斯の如くして社會には山を貫き太平洋を渡る無数の汽船及び鐵道網を作るの力が生じ、空中運輸の完成は自然的運輸の障害を全然除去し得るに至るものである。かかる域に達して尙全人類を包括する一大經濟的集中を阻害するのは只政治的運輸の障害あるのみである。(A. a. O., S. 112)

八

以上述べた所の分業の發達は集合需要の増加によると云ふ考は言葉こそ異なれ、アダム・スミスが富國論第一編第三章に分業は市場の範圍により制限せられる

と題下に述べた所の考を精練敷衍したものに外ならないのである。則ちスミスは分業の行はるゝ度は市場の範圍の廣狹の度によつて制限せられるものであると云つて、其例として運搬夫の如きは大都市に於てのみ分業として成立し得る所以を説き、又小村落に於て専門的の大工職、鍛冶職の成立し得ないことを説いてゐるのである。

更に彼は水運の便が市場を擴大するに容易なるの事實を挙げ、かかる水運の便ある地方の産業は早く發達することを説いてゐる。而してかかる便によつて二つの都市が相接觸し互に交換することによつて双方の産業を増進せしむと論じてをる。

之によつて見れば Oppenheimer が集合需要と名づけたのはスミスが市場と云つた言葉と同一の考に出づるものであつて、彼れは之の集合需要と分業則ち社會分化との關係に於てスミスの述べし所に一層の研究を加へて經濟社會發展の説を構成したものである。

此の點は則ちアダム・スミスが自由貿易を主張し、保護關稅に反對した有力なる

理由の一をなすものである。則ちアダム・スミスは一方に於ては一國の産業の發達は其國の資本の高によつて制限せられると云ふ彼の根本の思想からして、アダム・スミス紀念號拙稿參照、保護關稅によつて一國産業が發達し得るの理由なき所以を指點した。従つて保護關稅は只資本投下の方向を變更するに過ぎない。而も私人が自から其の利己心によつて定むる投資方向は社會に採り最も利益なるものであるとして保護關稅を批難してゐる (Ibid. pp. 418.) 彼が保護關稅に反對し、自由貿易を主張する第二の理由として挙げらるゝものは則ち茲に問題とする生産力の理由から來るものである。本來から云へば自由貿易を主張する一つの根本的理由は之が消費者を利する點に存するものであるが、不思議にもアダム・スミスは此の點にあまり注意を拂はなかつたのである。尤も彼は第四編第八章に於て消費は凡ての生産の唯一の目的であつて、生産力の利益は之が消費者の利益を増進する限りに於てのみ考慮せらる可きものであると云つてゐるけれども、(W. of N. Vol. II, p. 159) 彼は彼が Mercantile System の結論に於て始めて述べてゐる言葉であつて、又富國論第一版には發見し得ざる文句である。これが附加せられた

のは第三版からである。

否ミスが國際貿易の利益を説いたのは殆んど常に生産者の見地から見たものであつた。則ち彼は國際貿易を以て一國の餘剰品を處分し、之によつて此を生産したる勞働及び費用を償ひ得る唯一の手段と考へた。一つの國家は國際貿易によつて其餘剰品を輸出して自國に必要な貨物と代へることが出来るもので、もし此の輸出がなければ國內の生産力の一部は中止せられ年産額の價値は減少する。運輸の便ある地方が産業上に利益あるは只此の理由によるものであると云つてゐる。(W. of N. Vol. I. S. 352)更に彼は他の場所に於て外國の貿易の利益として次のやうに述べてゐる。外國貿易は其國の土地勞働の産物にして自國に必要な部分を外國に輸出し、之に對して需要ある他の物を輸入する。此の手段による時は分業が自國市場の狹隘なるが故に之が最高度に發達することの出来ない事情を防ぐことが出来る。則ち市場の擴大せらるる時は分業發達し、生産力増加し、國富を増進せしむる。然るに保護關稅は此の生産力の増加を阻止するものとして之を批難してゐるのである。(Ibid, p. 418)

九

吾人は茲に再び Oppenheimer に歸つて本論を結ばんとする。前に叙述し來たつた氏の意見は次の如き結論に到達するものである。

- (一) 運輸の障害少なきに従ひ經濟社會の領域は大となる。
 - (二) 經濟社會の領域大となるに従ひ集合需要大となる。
 - (三) 集合需要大となるに従つて社會的及び技術的分業及び結力は益々發達する。
 - (四) かかる協力の發展するに従つて生産能率は大となり、社會の富は増進するものである。
- 茲に於てか國富増進の經濟政策を抽出し來るのは極めて容易である。則ち
- (一) 人の勞働は凡ての財貨の唯一の源泉であり、唯一の生産力である。
 - (二) 此の生産力を殆んど無限に迄増加し得るのは協同である。
 - (三) 故に(1)協力の條件を作り改良すること、(2)協力を阻止する力を弱め之を除去することは生産力を増加するの手段である。

茲に協力の條件とは人命身體及び經濟を行ふ個人の財産に法律上の保護を與ふることを云ふものである。蓋し此の法律の保護なくんば生産力の源泉たる個人の勞働力は涸渴し、従つて集合需要は減少し、協力は極度に行はれない結果を生ずる。専制の支配する所、法律上の不平等の存在する處には貧窮あり、凡ての人が平等の權利を享有し、法律の支配する所には幸福がある。

茲に協力の障害とは運輸の障害を云ふのである。自然的運輸の障害は人口稠密と共に増加する社會的生產力の増加によつてのみ之を除去することが出来るものである。人爲的及び政治的障害は經濟的理由以外の或は之よりも強き他の理由がない時は之を除去することが出来、又當然除去す可きものである。

此の故に農業政策、工業政策、商業政策、財政政策、交通政策等總ての實際經濟學の目的が生産力の増進にありとせば、經濟學の立場より見て永久的の實際政策は只一つあるばかりである。則ち完全なる法律上の平等、社會構成の一員としての完全なる自由、交通上に於ける凡ての人爲的制限の撤廢是である。(A. a. O., S. 138 ff) 斯の如くして Oppenheimer は經濟社會の發達の爲めに個人に對して完全なる自

由を與へ、且つ凡ての人爲的制限を除去して其個人の活動を自由ならしむるを以て經濟政策の理想としたのである。換言すれば彼は極度の自由主義を以て經濟政策の理想としたのである。此の點は又スミスが國家の職分を以て國防、治安及び個人の力にて建設又は維持し得ざる公共事業及び施設の三職分に限りたる所と一致するものである。(Vol II, p. 184-5) 然らば Oppenheimer は現代資本主義經濟社會に於て商業が上述の社會的職分を發揮せしむる爲めに之に無制限の自由放任を許したが、換言すれば生産力増進の理由の下に假令一時的たりとも商業の自由を阻止する關稅を批難したかと云ふと、此に對して彼は幼稚産業保護の關稅は資本主義經濟の初期に於ては必要であると云つてゐる。蓋し其理由は資本主義の國家に於ては協力に伴ふ凡ての利益は皆資本家階級の懐に入るものである。而して自國に於ける外國産業の競争の結果、從來獨立せる者が勞働者となりて職を求むるに至ると、更に工業は從前の如く田舎の農業勞働者を吸収し得ざる爲め、絶對的自由貿易は勞働市場に恐る可き經濟的壓迫を加へるからである。然るに幼稚産業保護關稅の存在する時は内國工業は多くの勞働者を維持し、農村の無産者

を益々吸収するからして、共に賃銀を騰貴せしむと云ふのである。(A. a. O., S. 520)
以上は Adam Smith 及び Oppenheimer が生産力増進の點から自由主義を理由附けんとする説の大要である。

革命期の羅馬に於ける社會鬭争續編(一)

高橋 誠 一 郎

ポリビオスは羅馬に於ける「民衆」の地位を述べて「それは權力の最大なる配分を有するものであつて、而して其の憲法は最も顯明なる民主政の典型に屬するものと論斷を下して不可なきものである」と稱してゐる。而も、それは吾人がリゾイアスの後の諸編に於て見るが如く、民主政治にも、混成政治にも、又た國內最良の人士の政治にも非ずして、世界の會つて有したる最も堅實にして強大なる寡頭政治であつた。大官の職は比較的少數なる家族の掌中に領せられた。往昔執政官職が少數の舊貴族によつて保持せられたるが如く、紀元前三百年より百五十年に互れる執政官年表を通覽する時は (Corpus Inscriptionum Latinarum, i. 483 foll.)、吾人は今や同一の姓氏が絶えず再現しつゝあるを看出す可きである。表中には固より平民の